出典：雑誌地域創造 2016年3月発行号
©一般財団法人地域創造

ロンドン2012大会――文化プログラムの全国展開はどのように行われたのか

海外STUDY

吉本光宏（ニッセイ基礎研究所 研究理事）　協力：ブリティッシュ・カウンシル

オリンピックと文化 …… 56
ロンドン2012大会文化プログラムの全体像 …… 57
多様なプログラムで大きな成果を残したウェスト・ミッドランズ …… 60
14年のコモンウェルス大会に繋げたスコットランド …… 62
ロンドン2012大会の文化プログラムから学ぶこと …… 65
【資料編】東京2020大会に向けた検討・準備状況 …… 67

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京2020大会）の開催まで4年余りとなった。今年夏のリオ大会終了後には、文化プログラムがスタートする予定になっている。

オリンピックがスポーツばかりか文化の祭典でもあることは、徐々に認識されるようになってきた。前回のロンドン2012大会では、英国全土でかつてない規模の文化プログラムが実施された。東京2020大会では、それを上回る文化プログラムを全国で実施しようという気運が高まっている。

そこで今回の海外スタディでは、オリンピックと文化の関係や歴史を概観した上で、ロンドン2012大会の文化プログラムの全体像を把握。その後、地方都市の開催例としてウェスト・ミッドランズとスコットランドの実施状況、成果などをまとめ、最後に、東京2020大会に向けて、ロンドン2012大会の文化プログラムの成功のポイントや留意点を整理した。

オリンピックと文化

"The Olympics is the wedding of sport and art"。近代オリンピックの祖クーベルタン男爵（1863～1937）の残した言葉である。それほど彼は、スポーツと文化の融合を重視していた。それは現在のオリンピック憲章にも受け継がれている。

まず、オリンピズムの根本原則の1に「オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するものである」と明記されている。さらに、オリンピック競技大会の章では「組織委員会は少なくともオリンピック村の開村から閉村までの期間、文化イベントのプログラムを催すものとする」とされている（＊1）。

実際、今から100年以上前、1912年のストックホルム大会から文化プログラムは行われてきた。当時は、絵画、彫刻、建築、音楽、文学の5分野の芸術競技として実施され、スポーツ同様、優秀作品にメダルが授与されていた。その形は47年ロンドン大会まで続いたが、アマチュアの規定がプロの芸術家参加の妨げになったこと、受賞の大半が欧米の作品であったことなど、さまざまな問題があった。そのため、52年ヘルシンキ大会では芸術で競い合うという形式が見直され、同じ5分野で芸術展示が行われた。

54年、IOC総会で「芸術展示」が正式に承認され、56年メルボルン大会以降、88年ソウル大会までその形が続いた。展覧会だけでなく、音楽や演劇、ダンス等の公演も行われ、名称も芸術フェスティバル、文化プログラムなどさまざまだった。芸術競技が国際的だったのに対し、自国文化のアピールを重視した大会も少なくなかった。

64年の東京大会では、細川護立を委員長に芸術展示委員会を設置、日本固有の芸術に限定すること、主題をスポーツに限定しないこと、海外の芸術家に参加を要請しないことが原則となった。「日本最高の芸術品を紹介する」という基本方針の下、美術と芸能の2部門10分野でさまざまな展覧会や公演が行われた（＊2）。東京国立博物館で開催された「日本古美術展」には、鳥獣人物戯画、源氏物語絵巻など国宝154点を含む絵画、彫刻、工芸、建築、書道の877点が展示され40万人が来場した。

次の68年メキシコ大会は「カルチュラル・オリンピアード」と称し、五大陸バレエの公演を皮切りに、約1年間にわたる文化プログラムを展開。84年ロサンゼルス大会では10週間の「オリンピック・アート・フェスティバル」（＊3）を実施した。88年ソウル大会では「ソウル五輪芸術フェスティバル」として、五輪開催の約1カ月前から50日間、ソウル市の文化施設を中心に、各種公演や展覧会を実施。聖火リレーが行われた21都市でも文化イベントが行われた。

さらに文化プログラムの充実が図られたのが92年バルセロナ大会だ。ソウル大会終了の88年から「オリンピックへの道」と題した4年間の文化プログラムを展開。以降複数年の実施が定着し、96年アトランタ、2000年シドニー、04年アテネとも約3年間の文化プログラムが実施された。08年北京大会では、アテネ大会開催前の03年から6年間、文化プログラムを行った。

いずれの大会も、各年にテーマを設定したのが特徴で、聖火リレーが行われる都市などでも文化イベントが実施されるようになった。04年アテネ大会からはパラリンピックもオリンピック組織委員会が共同で運営

＊1　公益財団法人日本オリンピック委員会「オリンピック憲章」（2014年12月8日）
＊2　美術部門の古美術、近代美術、写真、スポーツ郵便切手、芸能部門の歌舞伎、人形浄瑠璃、雅楽、能楽、古典舞踊・邦楽、民俗芸能の10分野。
ちなみに、芸術展示総事業費は5,260万円、東京都が芸術展示に協力して実施した芸術祭の事業費は3,150万円（いずれも当時の金額）であった（東京都『第18回オリンピック競技大会東京都報告書』1965年3月）。
＊3　テアトル・ド・ソレイユ、ブッパタール舞踊団、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー、ロバート・ウィルソン、劇団SCOT、山海塾、鼓童など15カ国80団体が参加した。

するようになり、同大会ではパラリンピックに関連する特別な文化プログラムが実施された。08年北京大会では、一部の文化事業がパラリンピック終了時まで続いた。

こうしたオリンピックの文化プログラムの歴史を変えたと言われているのが、ロンドン2012大会である。

ロンドン2012大会 文化プログラムの全体像

ロンドン2012大会の文化プログラムは08年北京大会終了後に始まり、12年9月まで4年間実施され、参加者数は4340万人というスケールだった[図表1](*4)。

4年間のカルチュラル・オリンピアードは、英国の誰もがロンドン2012大会に参加する機会を提供し、あらゆる文化を通して、特に若者たちの創造性を刺激するようデザインされた。サッカーの予選などの一部を除いて競技はロンドン市内で行われるため、英国民の誰もがロンドン五輪に参加するチャンスを文化で提供する、というのが大きな狙いだった。そのフィナーレとして、12年夏には12週間にわたってロンドン2012フェスティバル(以下、2012フェスティバル)が開催された。

小さな市町村も含め、英国全土1000カ所以上で開催されたこと、文化施設よりも、公園や通り、広場、歴史的建造物、自然景勝地など屋外で開催された無料のものが多かったこと、アスリートの参加した204のすべての国や地域からアーティストが参加したこと、膨大な数の新作委嘱や初演が行われたことなどが大きな特徴だ。

そこからは、英国の文化をアピールするだけでなく、オリンピックという機会に世界中のアーティストにチャンスを提供しようという姿勢が見えてくる。無料イベントが多かったのは、普段、芸術や文化とは縁遠い人々も含め、あらゆる層に芸術にふれる機会を提供しよう、という意図からだ。

カルチュラル・オリンピアードも2012フェスティバルも、ロンドン市以外を11の地域に分けて全国展開された[図表2](*5)。

◎プログラムの構成

文化プログラムは、2012フェスティバルに含まれるものとそうではないものに分けられる。前者は後述の芸術監督によってキュレーションされているが、後者には公募型や参加型など多種多様なものが含まれている。主要なものを立ち上げ時期の順に記述し、[図表3]に整理してみた。

まず、08年には、全国展開を視野に入れ、インスパイア・プログラム、オープン・ウィークエンドという2つの公募・参加型の事業がスタート。それに加え、8つのメジャー・プロジェクトが立ち上げられた。

翌09年には、レガシートラストUKが資金提供した12の地域別プログラムを発表(*6)。英国テレコムと英国石油が筆頭パートナーとなり、それぞれロード・トゥ・2012、オープン・ウィークエンドを支援したほか、オリンピック宝くじからも資金提供が行われることになった。

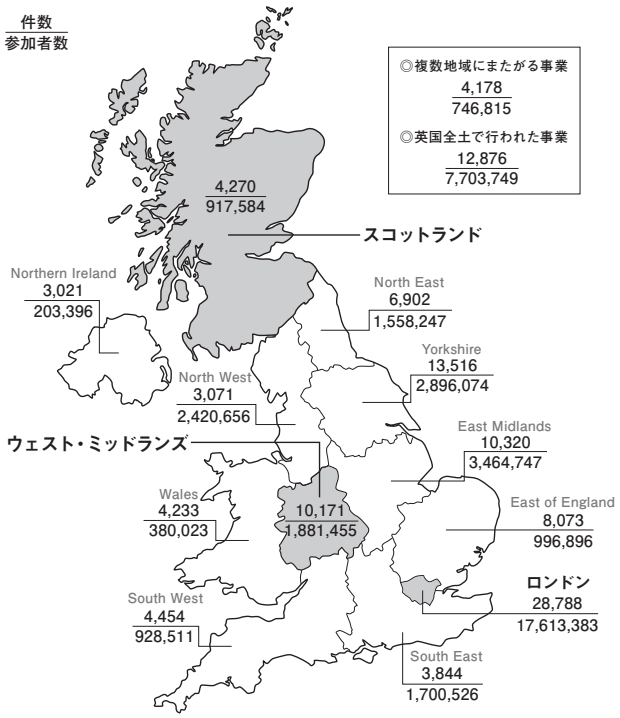
10年にロイヤル・オペラ・ハウス理事長のトニー・ホール氏を長とするカルチュラル・オリンピアード・ボードが正式に発足し、芸術監督にルース・マッケンジー氏が任命されて、2012フェスティバルの企画と実施コンセプトが策定された。12年1月からは、文化プログラムの一環として数多くのカウントダウン・イベントが実施され、6月21日

図表1　ロンドン2012大会の文化プログラムの概要

会期	カルチュラル・オリンピアード 2008年9月28日～2012年9月9日(4年間) ロンドン2012フェスティバル 2012年6月21日～9月9日(12週間)
参加者数	4,340万人(内無料イベント参加者数3,980万人、ロンドン以外の参加者2,580万人)
アーティスト	アスリートと同じ204の国と地域から4万464名が参加(内ロンドン2012フェスティバル2万5,000名、6,160名が新進アーティスト、806名が障がいのあるアーティスト)
新作委嘱	5,370作品(内ロンドン2012フェスティバル2,127作品)
会場	英国全土1,000カ所以上で開催(劇場や美術館、博物館などの文化施設だけではなく、歴史的建造物や公園、広場、大通り、自然景勝地など屋外で数多くの文化事業を実施)
メディアへの露出	BBCでの放送165時間、英国内の新聞報道5,700件、海外メディア38カ国364件

資料：Arts Council England and LOCOG「Reflections on the Cultural Olympiad and London 2012 Festival」(2013年4月)に基づいて作成
注：インスパイア・プログラムの大半とオープン・ウィークエンドは含まれていない。

図表2　ロンドン2012大会の文化プログラムの地域別実施状況



資料：Institute of Cultural Capital「London 2012 Cultural Olympiad Evaluation Final Report」(2013年4月)に基づいて作成
注：件数は事業数・イベント数ではなく「activity」の数で、教育プログラムやトレーニング、市民参加などの事業も含まれており、展覧会は開催日数でカウントされている。参加者数(public engagement)には、無料の観客や入場者、参加型事業の市民参加者やボランティアの数も含まれている。なお、この図の数字にはインスパイア・プログラムの大半とオープン・ウィークエンドは含まれていない。

＊4　後述のインスパイア・プログラムやオープン・ウィークエンドの参加者は含まれていない。
＊5　厳密にはロンドンを含むイングランドの9地域と、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの3カ国であるが、本レポートでは国も含め「地域」と表記した。
＊6　レガシートラストUKは、ロンドン2012大会のレガシーとなるような文化、スポーツ活動を支援することを目的に2007年にビッグ宝くじ基金(2,900万ポンド)、文化・メディア・スポーツ省(600万ポンド)、アーツカウンシル・イングランド(500万ポンド)の計4,000万ポンド(約68億円)の基金で創設された助成機関。オリンピック・パラリンピックの価値やビジョンに基づいて、文化とスポーツ、教育を連携させることを目標としたが、実際に支援したのは文化事業が中心だったようだ。

図表3　ロンドン2012大会の主要な文化プログラムの概要

プログラム名・枠組み		プログラムの概要
2008年にスタートしたプログラム		
BP Open Weekend		2008年から11年まで年1回のカウントダウン・プロジェクトとして英国全土で実施。毎年7月下旬の週末の3日間に文化とスポーツを結びつけたさまざまな催しが行われ、4年間で3,663件のイベントに340万人が参加した。BP（英国石油）の支援は2009年から。
Inspire Programme		2012年ロンドン大会とスポーツ、教育、文化活動を関連づける「Inspire by 2012」のロゴを付与する認定プログラム。09～12年に564の文化プロジェクトが認定を受けて実施された。
8つのメジャー・プロジェクト	Stories of the World	英国内の博物館のコレクションを活用し、14歳から22歳までの青少年とともに世界と英国の関係を表すストーリーを作成、展覧会やイベント、ワークショップ等を実施。アジア、アフリカ、南米等、多様な文化的背景をもつ青少年がキュレーターとして参加。
	Somewhereto_	スポーツ、芸術、文化に情熱を持つ16歳から25歳までの青少年を対象に、その情熱を形にするための場や機会、ネットワークを提供するプログラム。
	Film Nation	青少年を対象に、現代社会を反映する映画の制作機会を提供するプログラム。
	Discovering Places	知名度の高くない英国の自然遺産や環境を「発見」するプロジェクト。
	Artists Taking the Lead	カルチュラル・オリンピアードに相応しい「ビック・アイデア」をアーティストのプレゼンテーションによって選出。全英12の地域が各々パブリックアート・プロジェクトを委嘱し、展開した。
	UNLIMITED	障がいをもつアーティストの創作を促す大規模なプロジェクト。29の芸術家・芸術団体に委嘱し、英国全土で大規模に展開され、2012年にはサウスバンク・センターでフェスティバルが行われた。ロンドン2012大会のレガシーとして、現在も継続されている。
	World Shakespeare Festival	シェイクスピアを世界に向けてアピールし、英国と海外の劇団との交流やコラボレーションを促すフェスティバルを開催。ロンドンのグローブ座で開催された「グローブ・トゥ・グローブ」では、全37の戯曲を37カ国の劇団が37の異なる言語で上演した。
	Sounds	国際的な6つのプロジェクトの総称。毎年夏に開催される世界最大級のクラシック音楽のフェスティバル「BBC Proms」やロンドン東部で開催されるポップ音楽のフェスティバル「BBC Hackney Weekend」等、多数のコンサートやイベントを開催。
2009年にスタートしたプログラム		
レガシートラストUKが資金提供したプログラム	Community Celebrations	4地域で大規模なプロジェクトを展開（スコットランド：スピード・オブ・ライト、北アイルランド：ランド・オブ・ジャイアンツ、イースト・ミッドランズ：ゲームズ・タイム、サウス・ウエスト：ツリー・オブ・ライト）。
	National Programmes	テート・ムービー（5～11歳の子どもたち数千人がデジタル・フィルムを創作）とSomewhereto_（上記8つのメジャー・プロジェクトのひとつ）の2つの主要プロジェクトを中心に全英で展開。
	Regional Programme	12の地域ごとのプログラム。ウエスト・ミッドランズではコミュニティ・ゲームズとダンシング・フォー・ザ・ゲームズが、スコットランドでは文化、スポーツ、ボランティア、教育を結びつけるスコティッシュ・プロジェクトがそれぞれ実施された。
BT Road to 2012		筆頭パートナーのひとつ英国テレコムが支援したナショナル・ポートレート・ギャラリーのプロジェクト。著名なアスリートやロンドン2012大会の実現に尽力した人々を国際的な写真家が撮影し、ウェブ上に写真や映像、インタビューなどを掲載。2012年に展覧会を開催。
2012年に実施したプログラム		
Countdown		1月からフェスティバルの始まる6月まで、英国各地でさまざまなカウントダウン・プロジェクトが文化プログラムとして実施された。
London 2012 Festival（2010年に実施を発表）		6月21日から12週間、一生に一度きり（Once in a lifetime）をスローガンに全英で展開された大規模な芸術祭。8つのメジャー・プロジェクトやレガシートラストUKが資金提供を行った主要なプロジェクトも多くがこのフェスティバルの事業として実施されたほか、インスパイア・プログラムの中にもフェスティバルの事業に位置づけられたものがある。
ロンドン市の主なプログラム		ロンドン市は「A Summer Like No Other（どこにもない夏）」と題し、ロンドン2012フェスティバルの一環としてさまざまな野心的な事業を実施した。ピカデリーサーカスを1945年の戦勝パレード以来初となる通行止めにし、一日中街中でサーカスを展開した「ピカデリー・サーカス・サーカス」、ロンドン市庁舎のガラス張りの外壁やテムズ川の観覧車ロンドン・アイのスポークを使った野外パフォーマンス「One Extraordinary Day（ある特別な日）」、ロンドン市内の著名な21体の彫像に、有名なデザイナーが製作した帽子を被せたプロジェクト「Hatwalk（帽子散歩）」などが話題となった。

資料：各種資料、WEB掲載情報等に基づいて作成

図表4　ロンドン2012大会の文化プログラムの実施体制

注：クリエイティブ・プログラマーは各地域の文化チームに属するが、カルチュラル・オリンピアード・アンド・ロンドン2012フェスティバル・チームにも名前が記されており、そのチームの重要な一員と考えられていた。どこまでを組織委員会内の組織と位置づけるかについては、不明確な部分が多い。
資料：London 2012 Festival Official Guideおよび関係者への取材に基づいて作成

のフェスティバル開催に引き継がれた。

なお、大会開催都市のロンドン市は「どこにもない夏（A Summer Like No Other）」と題し、2012フェスティバルに連動させて、市内で数々の野心的な事業を実施した。

このように、ロンドン2012大会の文化プログラムはいくつかの流れに整理できるが、それぞれが別々のプログラムとして存在するのではなく、相互が複雑に関係しあっている（*7）。それ以外にも、各地で独自に実施されたものもあり、その全体像はとにかく複雑だ。

◎ロンドン2012フェスティバル

ルースさんが芸術監督に就任した時には、すでに数多くのプログラムが始まっており、彼女はその中からフェスティバルに相応しいものを選出したり、アドバイスを与えて強化したりした。さらにロンドン市や各地の文化施設、芸術機関の事業を加えたり、新規に事業を立ち上げたりして、英国全土でかつてない規模の芸術フェスティバルを実現させた。そこでは、芸術的な質の高さ、国際的に通用するプログラム、より幅広い露出が重視された。

その際に掲げられたのが、「一生に一度きり（Once in a Lifetime）」というスローガン

*7　インスパイア・プログラムの中にもフェスティバルに含まれたものがある一方で、メジャー・プロジェクトでもフェスティバルに含まれなかったものがある。また、8つのメジャー・プロジェクトのすべてが12地域で実施されたわけではない。

である。それは、一生に一度きりの文化的体験を提供する、ということだけではない。ルースさんは、アーティストにも一生に一度しか出合えないような作品、今まで不可能と考えていたことに挑戦してほしい、と呼びかけた。

◎運営体制

関係者の話を総合すると、10年にカルチュラル・オリンピアード・ボードが設立され、芸術監督が就任するまでは、文化プログラム全体について必ずしも万全な運営体制が整っていたとは言えないようである。事業も個別に立ち上がって多種多様なものが混在し、全体としての統一性を欠いていた、というのが実情のようだ。そうした状況を改善するため、組織委員会と文化・メディア・スポーツ省、ロンドン市がカルチュラル・オリンピアード・ボードを創設して芸術監督を任命、運営体制も強化された(＊8)。組織委員会の文化チームには、最終的に約70名の名前が記録されている(＊9)。

同じ頃、組織委員会は主要な資金提供団体などから成るステークホルダー・グループを設置しており(＊10)、後述の予算の管理や支出の仕組みも、その頃から徐々に明確になっていったものと思われる。こうしたプロセスを経て、文化プログラムの実施体制は、組織委員会やアーツカウンシル・イングランド、ロンドン市、レガシートラストUK、筆頭パートナーなどの密接な協力関係に基づいて整えられた。

ただし、膨大な数の事業を、それらの組織が直接実施したわけではない。個々の事業は全国各地の芸術機関や文化施設、地域の文化団体や市民団体などが主体となって企画・運営された。それらは事業パートナー(Delivery Partners)と呼ばれる。2012フェスティバルでは、英国全土の代表的な文化施設や芸術機関約240団体(一部海外も含む)が名を連ねている。具体的な企画や運営は、それらが中心となって、芸術監督などの関係者、組織委員会やアーツカウンシル、レガシートラストUK等の関係機関と調整しながら進められた[図表4]。

その際、文化プログラムの全国展開で極めて重要な役割を担ったのが、クリエイティブ・プログラマーだ。ロンドン市を含め12の地域に配属された13名の専門職である(＊11)。彼らが、組織委員会やアーツカウンシル・イングランド、レガシートラストUK、芸術監督などと連携しつつ、各地の特性を踏まえた文化プログラムの実現を支えた。

後述のウェスト・ミッドランズやスコットランドのケースから、各地域の文化チームのスタッフ数は4～5名だとすると12地域で50～60名。組織委員会の文化チームと合わせ、ピーク時には英国全土で100名を超えるスタッフが文化プログラムの運営に携わっていたことになる。さらに、個々の事業を実施した芸術機関や文化施設、各地の文化団体や市民団体の人数も加えると数百名、場合によってはそれを遥かに上回

図表5　ロンドン2012文化プログラムの財源と支出(億円)

◎財源(source)別内訳

資金提供者	金額	割合	備考
主要な資金提供者			
組織委員会	16.3	7.6%	
アーツカウンシル・イングランド	72.7	33.8%	8.5億円はLTUKへ
ビッグ宝くじ	49.3	22.9%	全額LTUKへ
オリンピック宝くじ	28.1	13.1%	全額LOCOGへ
ロンドン市	11.6	5.4%	3.7億円はLOCOGへ
文化・メディア・スポーツ省	6.5	3.0%	全額LOCOGへ
レガシートラストUK	3.1	1.4%	
ブリティッシュ・カウンシル他	0.2	0.1%	
小計	187.8	87.3%	
共同資金提供者			
チケット収入	4.5	2.1%	各事業に直接支出
イングランド以外のアーツカウンシル(＊)	3.3	1.5%	
放送局	1.9	0.9%	
五輪スポンサー	3.8	1.8%	
事業パートナー	3.8	1.8%	
地方公共団体	1.5	0.7%	
その他の公共団体	1.1	0.5%	
信託基金、財団	1.5	0.7%	
個人寄付	0.2	0.1%	
その他	5.8	2.7%	
小計	27.4	12.7%	
合計	215.3	100.0%	

◎分配機関 (distributer)別内訳

支出機関と支出/財源内訳	金額	割合
レガシートラストUK(LTUK)の支出内訳		
国・地域への助成	38.0	17.7%
全国プログラムへの助成	18.5	8.6%
管理費・人件費(＊)	4.3	2.0%
小計	60.9	28.3%
アーツカウンシル・イングランドの支出内訳		
アーティスト・テイキング・ザ・リード	8.7	4.1%
フェスティバルの委嘱経費	17.9	8.3%
アンリミテッドの委嘱経費	3.9	1.8%
国・地域プログラム	1.3	0.6%
その他のカルチュラル・オリンピアード	2.9	1.3%
インスパイア・マーク・プロジェクト	22.6	10.5%
管理費・人件費(＊)	4.4	2.0%
小計	61.8	28.7%
組織委員会(LOCOG)の財源		
組織委員会の自己資金	16.3	7.6%
オリンピック宝くじ	28.1	13.1%
文化・メディア・スポーツ省	6.5	3.0%
ロンドン市	3.7	1.7%
アーツカウンシル・イングランド	2.2	1.0%
レガシートラストUK	0.2	0.1%
その他	0.2	0.1%
小計	57.3	26.6%
ロンドン市	7.9	3.6%
共同資金提供者	27.4	12.7%
合計	215.3	100.0%

注：組織委員会、アーツカウンシル・イングランド、レガシートラストUK、ロンドン市のいずれかを経由して資金提供が行われた事業のみを対象とした金額で、実際には、これ以外にも各事業の事業パートナーや地方自治体等からも相当の資金が投入された。
＊イングランド以外のアーツカウンシルは、クリエイティブ・スコットランド、アーツカウンシル・ウェールズ、アーツカウンシル・北アイルランドの3団体。
＊レガシートラストUKの人件費にはインターンシップが、アーツカウンシル・イングランドの人件費にはクリエイティブ・プログラマーとインターンシップがそれぞれ含まれる。

資料：Institute of Cultural Capital「London 2012 Cultural Olympiad Evaluation Final Report」(2013年4月)および 元LOCOG文化チームのメンバーからの提供資料に基づいて作成。
1ポンド＝170円で換算

＊8　その際、文化チームは文化・セレモニー・教育部局からブランド・マーケティング部局に移された。
＊9　「LOCOG, London 2012 Festival Official Guide, 2012」に掲載された「Cultural Olympiad and London 2012 Festival team」。アーツカウンシル・イングランド(後述のクリエイティブ・プログラマー等を含む)や芸術監督、ロンドン市の文化部長なども含まれており、それらがひとつのチームとして取り組んでいたことがわかる。
＊10 Cultural Olympiad Stakeholder group。構成メンバーは、筆頭パートナー (Premiere Partner)の英国テレコム、英国石油、主要資金提供3団体(Principal Funder)のアーツカウンシル・イングランド、オリンピック宝くじ協会(Olympic Lottery Distributor)、レガシートラストUKにブリティッシュ・カウンシルを加えた6団体。
＊11 ロンドン市のみ、大会をホストする6つの区のコーディネート担当と、それ以外の地域のコーディネート担当の2名が配置された。

る人々が、ロンドン2012大会の文化プログラムに携わったと考えられる。

◎予算規模と財源

ロンドン2012大会の文化プログラムの予算規模として127万ポンド（約215億円）という数字が紹介されてきた。しかしそれは、組織委員会、アーツカウンシル・イングランド、レガシートラストUK、ロンドン市のいずれかが資金を提供した事業のみを対象とした数字で（＊12）、実際にはそれを遥かに上回る資金が4年間の文化プログラムに費やされた。

まず、インスパイア・プログラムは、アーツカウンシル・イングランドからも資金提供が行われたが、提案時点で運営資金が十分に確保されていることが条件となっていたため、大半の経費は215億円には含まれていない。また後述のとおり、事業パートナーが自己資金や民間企業からの支援を支出している。さらに、地方自治体や財団、基金などの公的団体が、各地の文化プログラムを直接支援しているケースも少なくない。それらを含めた総額を把握することは不可能だが、英国全土でさまざまな機関から4年間の文化プログラムに膨大な資金が投入されたことは間違いない。

それを前提に、215億円の内訳について、財源別、分配機関別に整理したのが［図表5］である。財源別では、アーツカウンシル・イングランドが約34％と最も多く、ビッグ宝くじの23％、オリンピック宝くじの13％、組織委員会の8％と続く。図表のとおり、それらがレガシートラストUK、アーツカウンシル・イングランド、組織委員会を経由して全国の事業に支出された。

共同資金提供者には、イングランド以外の3地域のアーツカウンシル、大会スポンサー（＊13）、事業パートナー、地方自治体、基金や財団、個人寄附などが含まれるが、それらは、個々の事業に直接支出された。大会スポンサーは2％弱と意外と少ない（＊14）。

このように、ロンドン2012大会の文化プログラムの予算は一元的に管理されたわけではなく、プログラム同様、極めて複雑な構造となっていた。

◎全国展開とフェスティバルを可能にした3つのロゴマーク

ロンドン2012大会の文化プログラムの構造を理解し、東京2020大会の参考とするためにも、ロゴマークについてふれておく必要があるだろう。ロンドン2012大会の文化プログラムには3種類のロゴマークが存在した。カルチュラル・オリンピアード、インスパイア・マーク、そして2012フェスティバルの3つである。五輪マークとパラリンピックのロゴが付与されているのは最初のひとつのみで、後の2つにはない。しかし、どれも数字の2012をモチーフにしたロンドン2012大会のエンブレムがあしらわれ、一目でロンドン2012大会の事業だと認識できる仕組みになっている。

現在のオリンピック・パラリンピックはIOCと大会スポンサー、組織委員会との契約に基づき、オリンピック・パラリンピックブランドの使用等について厳密なルールが定められている。それを守りながら、より多くの人々が主体的にロンドン2012大会に参画できる仕組みを提供したのが、インスパイア・プログラムとそのマークである。文化の分野をスタートに、IOCとの度重なる折衝の末07年につくられたものだ（＊15）。

具体的には、全国の市民団体や文化団体から提案を受け入れ、一定の条件に合致したものが組織委員会の認定を受けてインスパイア・マークの使用が認められた。4年間で文化以外の分野も含め2700を超える事業が実施され、英国民の6人に1人に相当する1000万人が参加。そのうちの25％が文化分野の参加だった（＊16）。このマークは、市民主導の草の根的な文化プログラムの全国展開を支える重要なツールだったと言える。

その成果も参考に開発されたのが、フェスティバルのロゴマークである。フェスティバルの事業を企画、実施した文化施設や芸術機関には、大会スポンサー以外の企業から支援を受けているところも含まれている。オリンピックとパラリンピックマークのないフェスティバルのロゴによって、そうした文化施設や芸術機関の事業も、特定の条件の下で、フェスティバルのプログラムに位置づけることが可能になった（＊17）。

例えば、ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツが主催したデビッド・ホックニー展の場合、美術館は大会スポンサーとは異なる銀行から支援を受けていたが、芸術監督と美術館の意向が合致し、フェスティバルの事業の一つとして実施されることとなった。ただしロゴの使用についてはガイドラインが設けられ、大会スポンサー以外のロゴや企業名とフェスティバルのロゴの間に一定の距離を保つなど、厳密な管理が行われた。

多様なプログラムで大きな成果を残したウェスト・ミッドランズ

ウェスト・ミッドランズはロンドンから鉄道で1時間半に位置する英国第2の都市バーミンガムを中心とするエリアで、人口は約550万人。バーミンガム都市圏（人口約230万人）を出ると、のどかな田園地帯が広がる。バーミンガム市は若年層が多い都市で、バーミンガム市響やバーミンガム・オペラ等が拠点を構える。

域内にはシェイクスピアの生誕地ストラットフォード・アポン・エイボンがあり、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの拠点劇場がある。世界初の鋳鉄製のアーチ橋アイアンブリッジ一帯の峡谷は世界遺産に指定され、カルチュラル・オリンピアードのオープニングイベントが行われた。

◎プログラムの構成と事業内容

この地域で実施された文化プログラム

＊12 この4者が資金提供をしなかった事業の予算は、組織委員会では捕捉できなかったためである。
＊13 筆頭パートナー（Premier Partner）は英国石油と英国テレコムの2社、サポーターはBMW、ユーロスター、フレッシュフィールズ（会計事務所）、パナソニック、サムスンの5社でいずれもロンドン2012大会もしくはワールドワイドの大会スポンサーである。
＊14 ただし、英国テレコムがスポンサーとなったBT Road to 2012など、大会スポンサーが支援をした文化プログラムの中には、先に記述した主要4機関が資金提供をしていないものもあり、それはこの中に含まれていないため、実際の金額はこれより大きいと思われる。
＊15 インスパイア・プログラムは、ボランティアや教育プログラム、文化プログラムとともに英国全土において、ロンドン2012大会により多くの人々に参加（engagement）を促すための枠組みで、文化以外にもスポーツ、教育、持続可能性、ボランティア、ビジネスなど6分野の非営利活動が対象になっている。

の事業数は９８６件で、イベントや活動の総数は１万１４５０件に上る。事業の内訳は［図表６］のとおりで、08年に始まったメジャー・プロジェクトやオープン・ウィークエンド、インスパイア・プログラムなども実施され、フェスティバルの事業も１００件以上を数える。海外からの招聘や国際的な事業、市民参加型の文化イベント、地元文化団体の活動を強化する事業、大型のスペクタクルなど、その内容は多彩だ。

◎運営と成果

この地域のクリエイティブ・プログラマーを務めたのはポール・ケインズさんだ。元々文化関係のマーケティングの仕事をしており、07年に就任した。彼のほかにレガシートラストUKの担当2名、事業実績に関するリサーチ担当1名の計4名が文化チームの顔ぶれだ(＊18)。同時に域内の有力な芸術機関や文化施設の代表らでプログラム委員会を設置し、事業の推進にあたった。

企画は、地域の特性を反映し、地域からプログラムを立ち上げていくというアプローチで進められた。ビジョンは次の3つだ。①世界的でクリエイティブなプログラムと革新の歴史によってウェスト・ミッドランズをよりよく理解してもらうこと、②より多くの、今までとは異なる人々が文化活動に参加すること、③地元の文化セクターが将来に備え、より強く野心的になること。

最初の1年間、ポールさんはとにかく多くの人々と話をすることに時間を費やした。当初、ロンドン２０１２大会そのものに懐疑的な人が多かったため、メディアを活用しオリンピックに対する理解を得ることも彼の仕事だった。オリンピックに懐疑的なままでは、文化プログラムへの賛同も得られないからだ。

彼は、域内の文化団体や芸術機関との面会、地方自治体や資金提供団体との協議を続け、既存の事業を実施するだけでなく、大胆な事業に取り組み、地域を前進させるために文化プログラムに取り組むべきだ、と訴えた。カルチュラル・オリンピアードは4年間続いたが、ほとんどの事業は最後の1年半の間に実施された。それまではプログラムの企画や事業計画の立案、そして地域内の実施体制の強化に注力した。

最初は、インスパイア・プログラムやレガシートラストUKが資金提供を行う事業などについて、芸術団体や文化施設から提案を受け入れ、それを組織委員会やレガシートラストUKと調整するような仕事が中心だった。しかし、10年に２０１２フェスティバルの実施が決まって以降、ポールさんからさまざまな団体にアプローチして企画を立ち上げていった。最初の年に数多くの団体や機関と対話を続けていたことが、その際に大いに役立った。フェスティバルの事業については、芸術監督のルースさんと相談しながら内容を固めていった。

ポールさんの役割は、組織委員会やアーツカウンシル・イングランド、レガシートラストUKへの窓口であり、地域の人々や団体に参加を促すことだった。その際、リサーチ担当が重要な役割を果たしたという。どんな実績や成果があったかを定期的に発表することで、地域の賛同や資金的なサポートを受けるのに有効だったからだ。

その集大成として12年12月に評価報告書がまとめられた。観客へのアンケート調査の結果や経済効果については［図表7］に示したとおりである。文化プログラムによって35万人がより頻繁に文化事業に参加するようになり、芸術団体や文化施設の中には、今まで以上に野心的な事業やより広いエリアを対象に活動を行うようになったところもある。文化プログラムによって、健康増進や自信の向上、社会生活の改善などに効果があり、それらの社会的リターンは58億

図表6　ウェスト・ミッドランズにおける文化プログラムの概要

概要	
事業数(projects)	986
イベント数(events & activities)	11,450
世界初演	77
英国初演	10
参加者数	286.2万人
域外からの参加者数(参加者数の内数)	16.5万人
プログラムの種類別事業数	
Community Games	601
London 2012 Open Weekend / Handover Weekend	168
London 2012 Festival	107
Inspire Mark	88
Dancing for the Games	33
Music Nation	6
Olympic Torch Relay Evening Celebrations	4
Museums, Libraries, Archives programmes	5
New Music 20 x 12	4
Other Cultural Olympiad	3
Legacy Trust UK (national projects)	3
Film Nation	1
Artists Taking the Lead	1

資料：Cultural Research Analyst, West Midlands Cultural Observatory「Cultural Olympiad in the West Midlands: An evaluation of the impact of the programme (2008-2012)」(2012年11月)に基づいて作成
注：種類別事業件数の合計は1,024件で986件を上回っているが、２つもしくは3つのプログラムに属している事業が含まれているため。

図表7　ウェスト・ミッドランズにおける文化プログラムの成果

参加者への主なアンケート結果	
文化芸術の立地する地域としてより相応しくなった	75%
もう一度、文化施設やイベントの開催地を訪問したい	68%
事業に参加して楽しかった	95%
事業に参加して自信がついた	74%
新しい友だちができた	70%
シビックプライドが高まった	76%
経済的効果	
観客の消費支出額	160.7億円
事業実施団体の支出額	30.3億円
波及効果	55.8億円
パブリシティ効果（広告費換算）	18.8億円
雇用効果（パートタイム含む）	130人

資料：Cultural Research Analyst, West Midlands Cultural Observatory「Cultural Olympiad in the West Midlands: An evaluation of the impact of the programme (2008-2012)」(2012年11月)に基づいて作成

＊16 Department for Culture Media & Sport「2012 Games Meta Evaluation: Report 5 Post-Games Evaluation Summary Report」(2013年6月)およびKnight, Kavanagh and Page「London 2012 Olympic Games and Paralympic Games Inspire programme legacy survey: United Kingdom」(2013年2月)。
＊17 ちなみに、フェスティバルの公式ガイド(約140ページ)には五輪マークは一度も登場しない。ただし、表紙にはフェスティバルの一環として12名のアーティストに委嘱されたポスター用の作品のうち、レイチェル・ホワイトリードの《L○nd○n 2○12》が使用されている。それは5色の輪、すなわちオリンピック五輪をモチーフにしたもので、五輪ロゴとは異なる方法でオリンピックの事業であることをアピールしており、関係者のクリエイティブな発想や工夫が読み取れる。
＊18 West Midlands for 2012 Team。ほかにクリエイティブプログラマーのアシスタントとして1名のパートタイムスタッフがいた。

●ウェスト・ミッドランズの特徴的な事業――“ヘリコプターの四重奏”を含むオペラ『光から水曜日』世界初演など

77件の世界初演の中でも話題になったのがシュトックハウゼンのオペラ『光から水曜』日だ。作曲家が27年間を費やし、それぞれに曜日の名前のついた7部作のオペラ「光」のうち、この作品だけは一部のパートを除いて全曲上演されたことがなかった。宙に浮いたソリストの演奏、4機のヘリコプターに弦楽奏者が乗り込んで空中で共演する“ヘリコプターの四重奏”など、実現困難な要素が数多く含まれているためだ。

バーミンガムオペラの主催で、郊外の元工場を使って5回の公演が行われ、世界中から観客が訪れた。この事業にはアーツカウンシル・イングランドや文化・メディア・スポーツ省、バーミンガム市、財団や大会スポンサーが資金を提供したほか、オペラファンから多大な個人寄附が寄せられて実現した。寄附活動は公演直前まで続いたという。

ワールド・シェイクスピア・フェスティバルもこの地域で開催された大規模なプログラムだった。ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの企画で、シェイクスピアの誕生日4月23日にスタート。ストラットフォード・アポン・エイボンのロイヤル・シェイクスピア劇場のほか、ロンドン、ニューカッスル／ゲーツヘッド、エジンバラなど全英7都市の劇場で展開された。その一環としてロンドンのグローブ座では、37のシェイクスピア作品を、37カ国から招聘された劇団が37の異なる言語で連続上演する「グローブ・トゥ・グローブ」が開催された。

このフェスティバルは120を超える団体がパートナーとなり、プロ・アマ合わせて1万人以上のアーティストが参加。延べ90万人以上の観客が訪れた。日本からは蜷川カンパニーがロンドンのバービカンセンターで『シンベリン』を上演、「グローブ・トゥ・グローブ」では劇団地点が招聘され『コリオレイナス』を上演した。

参加型の代表例は、レガシートラストUKが地域プログラムのひとつとして支援し、インスパイア・プログラムにもなった「コミュニティ・ゲームズ」である。これは、小さな運動会に文化を融合させたような地域の参加型イベントで、2009年夏に7件のパイロット・イベントとして始まり、10年に29件、11年に190件と急速に拡大。12年にはソーシャル・アクション・ファンドから200万ポンドの資金を獲得して全国プロジェクトとなり、375件が実施された。4年間で延べ601件のイベントに44万人が参加。小さな町や村、自治会や職場でも気軽に実施できるようツール・キット（手引き書）が作成され、1件当たり平均23人のボランティアが運営を支えた。ロンドン2012大会終了後、同じ名前の組織が設立され、現在も継続されている。

コミュニティ・ゲームズでは運動会とダンスイベントなどが一緒に開催された

円に相当するという興味深い結果も示されている。巻末には986件の事業を実施した700を超えるパートナーの名前が記載され、まさしく地域をあげての取り組みだったことがわかる（*19）。

ウェスト・ミッドランズがレガシートラストUK、アーツカウンシル・イングランド、組織委員会、アドバンテージ・ウエスト・ミッドランズ（*20）から文化プログラムのために獲得した資金は約12億円、地元から調達した資金は約19億円（内公的団体が10億円）で合計約30億円である（*21）。なお、大会スポンサー以外の民間企業からも支援の申し入れが多数あったが、残念ながらそれらは断らなければならなかったとのことだ。

14年のコモンウェルス大会に繋げたスコットランド

スコットランドは英国を構成する4つの国のひとつで、14年の独立住民投票に象徴されるように、政治や経済、文化でも独自の路線を歩む傾向が強い。人口は520万人、面積は約8万㎢。ともに北海道とほぼ同じだ。首都はエジンバラ市（48万人）だが、グラスゴー市（60万人）の大都市圏に人口の半分近くが集積している。

そのスコットランドの文化プログラムの最大の特徴は、14年にグラスゴー市で開催されたコモンウェルス大会（以下、グラスゴー2014大会）（*22）の文化プログラム（以下、カルチャー2014）への継続展開を念頭に行われたことだ。グラスゴー2014大会の開催が決まったのはロンドン2012大会決定の翌年07年の11月。09年9月には、スコティッシュ・アーツカウンシルが（*23）、ロンドン2012大会とグラスゴー2014大会の戦略構想をまとめている。

◎プログラムの構成と事業内容

文化プログラムは直接的な委嘱、公募の2つの方法で進められた。事業数はウェスト・ミッドランズに比べるとかなり少ないが、エジンバラやグラスゴーなどの大都市だけではなく、小さな田舎町、海岸や離島、山や谷、河川などの自然環境を使って多様な事業が行われたのが大きな特徴だ［図表8］。

種類別にみると、8つのメジャー・プロジェクトでは、アーティスト・テイキング・リードに加え、アンリミテッドは全国の29件のうち5件がスコットランドで実施された。ワールド・シェークスピア・フェスティバルの作品も含め、エジンバラ国際フェスティバルとも連携してさまざまな事業が行われた。レガシートラストUKの地域プロジェクトや、件数は少ないもののインスパイア・プログラムも実施されている。

カルチャー2014までの継続、発展を視野に入れたプロジェクトも少なくない（*24）。気候変動をテーマに12～14年まで3年間行われたSea Change: Scottish Islands Project、2012フェスティバル

＊19 文化施設や芸術機関、市町村に加え、小中学校、高校、大学、図書館、子どもセンター、教会、ホスピス、テニスクラブ、ランニングクラブ、温泉ガイドなど多種多様な団体が名を連ねており、カルチュラル・オリンピアードが、専門的な芸術機関から草の根の市民団体まで極めて幅広い組織や団体によって支えられたことがわかる。
＊20 1999年に英国政府によって設立された9カ所の地域開発公社（Regional Development Agencies）のひとつ。2012年3月に政府の組織改正によって廃止されるまで、ウェスト・ミッドランズでは文化プログラムに資金提供を行っていた。
＊21 この金額に、事業パートナーが直接支出した金額や文化チームを経由しなかったものも含まれているかどうかは不明。

の主要プロジェクトBig Danceと連携して行われたGet Scotland Dancing、食をテーマにしたCulture Kitchenなどである。

これらスコットランドの文化プログラムの予算は約25億円だった[図表9]。

◎運営と成果

スコットランドのクリエイティブ・プログラマーを務めたのはレオニー・ベルさんだ。就任は08年末、13人の中で最後で、ロンドンではすでにカルチュラル・オリンピアードが始まっていた。レオニーさんが着任したとき、スコットランドではロンドン2012大会に対して冷淡な見方が漂っていた。民間企業がスポンサーする商業主義的なイベントだという見方が多く、文化プログラムに対する信頼も低かったという。そこで彼女は文化関係者やアーティスト、スコットランド内の市町村の関係者に広く意見を聞くことにした。

最初は「ロンドンのオリンピックのために私たちに一体何ができるの」と彼らに問いかけられることが多かったが、途中から「オリンピック・パラリンピックは私たちのために何ができるか」と主語を入れ替えて相談するようにした。それが重要なターニングポイントとなり、文化プログラムへの関心や賛同を得られるようになっていった。

そして、ロンドン2012大会とグラスゴー2014大会の文化プログラムについて、次の3つの目標が定められた。

- アーティストの想像力に富んだ活動や大胆な発想を両大会の文化プログラムの中心に位置づけ、両大会がスポーツにとどまらない催しであること、スコットランドの創造性が世界クラスであることを国内外に示す
- スコットランド各地の市町村、森林や山、河川、海岸で展開される質の高いイベントや作品を、TVなどのメディアを含めさまざまな方法で体験できる機会をあらゆる人々に提供する
- スコットランドを、創造的で現代的な国、そして芸術家や文化団体、ならびに彼らが国や地域で果たす役割を重視できる国に位置づける

特に、ウィスキーやキルト、バグパイプという決まり切ったスコットランドのイメージを払拭し、最先端の芸術表現に取り組む革新的で創造的な地域だということをアピールしたかった、とレオニーさんは語る。

彼女を含め10名強のメンバーでクリエイティブ・スコットランド内に文化チーム(Creative Scotland's London 2012 - Glasgow 2014 team)を設置。フルタイムは2～3名だったが、各芸術分野のディレクターや担当者なども従来の仕事と掛け持ち形で取り組んだ。彼らの経験や知識、ネットワークを文化プログラムの企画や実施に活かすためだ。ロンドン2012大会に対する懐疑的な意見には「確かにオリンピックはロンドンだけのものかもしれません。でも、2年後のグラスゴー2014大会の下地づくりに利用すればいいんです」と説得したそうだ。

こうして、2つの文化プログラムは並行して企画、準備された。ただ、それだけ大規模で国際的な2つの文化プログラムを

スコットランドのクリエイティブ・プログラマーを務めたレオニー・ベルさん
Photo: Mitsuhiro Yoshimoto

図表8　スコットランドにおける文化プログラムの概要

プログラム別に見た事業数		
London 2012 Festival	Artists Taking the Lead	1
	Edinburgh Festivals	10
	Unlimited	5
	Other	14
Other Cultural Olympiad	*Get Scotland Dancing*	2
	New Music 20x12	4
	The Scottish Project (Legacy Trust UK)	4
	Inspire	4
	Looking towards 2014	5
	Year of Creative Scotland	1
	2012/2014 Commissions	1
	Ceremonies & Torch Relay	2
	Ceremonies & Paralympic Torch Relay	1
合計		54
活動の種類と件数(46事業が対象)		
公演(回数)		992
展覧会／イベント(日数)		197
放送		3
アウトリーチ(教育、トレーニング、参加)		2,222
その他		114
合計		3,528
新作・委嘱作品(合計の内数)		198
参加アーティスト・団体数(45事業が対象)		
アーティスト		3,148
内 障がいのあるアーティスト		16
内 新進アーティスト		567
団体数		868
観客・参加者数等(47事業が対象)		
観客(有料)		204,552
観客(無料)		467,067
小 計		671,619
参加型イベントへの参加		24,008
ボランティア		1,084
小 計		25,092
合計		2,489,871

資料：University of the West of Scotland「Evaluating Scotland's London 2012 Cultural Programme」(2013年12月)
注：この調査は主にLondon 2012 Festivalの行われた2012年6月～9月に実施された事業を対象としている。

図表9　スコットランドにおける文化プログラムの予算(億円)

財源	金額
クリエイティブ・スコットランド	8.5
レガシートラストUK	6.5
スコットランド政府万博基金	1.7
組織委員会・オリンピック宝くじ	1.6
その他	1.6
自己資金	1.0
その他の協力機関	3.9
計	24.8

資料：University of the West of Scotland「Evaluating Scotland's London 2012 Cultural Programme」(2013年12月)
注：主に2012年6月～9月に実施された事業が対象。その他の協力機関は、民間基金、BBC、アーツカウンシル・イングランド、イベント・スコットランド、地方公共団体・基金、エジンバラ・フェスティバル、スコットランド政府等。事業パートナーの支出が含まれているかどうかは不明。

＊22 コモンウェルス大会(Commonwealth Games)は英連邦に所属する53の国と地域が参加する総合スポーツ大会。スコットランド、イングランド、ウェールズ、北アイルランドは別のチームとして参加する。
＊23 スコティッシュ・アーツカウンシルは2010年にクリエイティブ・スコットランドに改組され、現在に至る。
＊24 表のLooking towards 2014以外にもいくつかのプロジェクトは2014までの継続、発展を視野に入れて行われた。

●「ビッグ・コンサート」── 3,000人のまちの希望となった子どもたち

スコットランドで2012フェスティバルのオープニングを飾ったのが「ビッグ・コンサート」だ。主催したのはシステマ・スコットランド。子どもたちに楽器の演奏を教え、「ビッグ・ノイズ」という子どもオーケストラを編成して地域の活性化に取り組む団体だ。グラスゴー市から北東約30kmのスターリング市ラプロッホ地区で2007年に活動を開始。今では、生後6カ月から16歳まで約500人の子どもたちを対象に、週4日11時間の楽器教室を無料で開いている。人口3万6,000人のスターリングは、スコットランドで最も小規模な都市のひとつで、ラプロッホ地区の住民は約3,000人、公営住宅に暮らす低所得者層が多い。

システマ・スコットランドCEOのニコラ・キリアンさんが、クリエイティブ・スコットランドからロンドン大会の文化プログラムの話を聞いたのは10年頃。ちょうど子どもたちのオーケストラをもっと大きな舞台、できれば国際的な形で披露したいと考えていた時期だった。ベネズエラのエル・システマ出身で国際的に活躍する指揮者グスターヴォ・ドゥダメルとシモン・ボリバル・シンフォニー・オーケストラ(SBSO)を招聘し、子どもたちと共演してもらうというアイデアを思いつき、芸術監督のルースさんに相談。フェスティバルを著名なアーティストだけのものにはしたくないと考えていた彼女は、その企画に興奮気味に賛同したという。

ニコラさんは「この企画が地域の希望のシンボルとなり、小さなコミュニティでもチャンスを掴み、自分たちを変えられる」ということを示すものにしたかった。そしてビッグ・ノイズの活動をラプロッホ以外の地域にも広げるきっかけにできれば、と考えていた。クリエイティブ・スコットランドや組織委員会のほかに、スポーツや文化イベントに資金提供を行うイベント・スコットランドやスターリング市、BBCの協力も得て企画を進め、実現にこぎ着けた。この事業の資金調達はチャリティ団体のシステマ・スコットランドの活動とは切り離し、別会社を設立して行ったという。

本番の6カ月前からは、プレ事業として、地区内の全小学校で6週間のスペイン語教室、スタッフによるベネズエラやドゥダメルに関するトーク、ベネズエラの音楽と食を楽しむ一夜などが開催された。ドゥダメルとオーケストラは本番の4日前から滞在。ラプロッホ地域の小学生全員がSBSOのリハーサルを間近で見学し、選抜された80人の子どもたちが、各々オーケストラメンバーの横に座り、ドゥダメルの指揮で練習した。オーケストラメンバーによる7回の室内楽の演奏会なども行われた。

コンサート会場はスターリング城の麓に広がる広大な広場だ。不運にも2012フェスティバルの初日、コンサートの行われた6月21日は朝から本格的な雨になった。元々雨の多いシーズンで、ステージには仮設の屋根を設けていたが会場は雨ざらしだ。万一に備え、広場の水はけの状況などを市の担当部局に確認し、問題ないという回答をもらっていた。そうした中、夕刻から始まった演奏会には、雨合羽やレインコートを着た7,000人もの観客がイスや食べ物、飲み物を持参して来場した。ピクニック・コンサートとして案内していたからだ。

コンサートでは、まず子どもたち116人のビッグ・ノイズ・オーケストラがドゥダメルの指揮でヘンリー・パーセルの曲を披露、次に38人の選抜メンバーとオーケストラ団員がベートーヴェンの『エグモント序曲』を共演した。その後SBSOがベンジャミン・ブリテンの『青少年のための管弦楽入門』を演奏して前半が終了。後半は同オーケストラによるベートーヴェンの『交響曲第3番』が演奏され、アンコールでは『ウエストサイド物語』のマンボに合わせ、スターリング城から花火が打ち上げられた。

結局7,000人の観客は、ほとんど全員が最後まで残ったという。演奏会の様子はBBCによって全英で放映されたほか、200カ国に配信され、数多くのメディアにも取り上げられた。演奏会終了後、ニコラさんはTVで見たという地域住民から数多くのメールをもらう。「演奏会を見て涙が出てきた。あの子たちを心から誇りに思うわ」「人生で最も誇らしい瞬間だった。だって私の娘があのステージの上にいたのよ」。

ロンドンで開かれるオリンピックの芸術祭のオープニングが、ロイヤル・フェスティバル・ホールのような著名な会場ではなく、スコットランドの小さな貧しいまちで行われた意義は大きい。この冒険的なアイディアが可能になったのは、地域のシンボリックな存在になり得る質の高いものを目指したこと、多くのパートナーがそれに賛同し、協力を惜しまなかったこと、そして幸運にもドゥダメルの日程が合ったことだ、とニコラさんは振り返る。

人前で演奏できるまでに楽器をマスターした自信、演奏会を成し遂げた達成感など、子どもたちにも大きな成長の機会となった。自分たちの演奏が地域の大人たちを元気づけたことが、子どもたちには何より大きかったそうだ。ラプロッホはさまざまな課題を抱え、メディアに取り上げられることもほとんどないまちだった。そんな地域に、世界中が注目するロンドン2012大会で、小さな子どもたちが誇りや自信をもたらしたのだ。

ビッグ・コンサートはシステマ・スコットランドにも大きな一歩となった。彼らの活動を望む地域がほかにも出てきたからだ。13年6月にグラスゴー市ゴーバンヒル地区に新たなセンターを開設。14年のコモンウェルス大会では、両地域の子どもたち200人でコンサートを開催した。さらに15年1月にはアバディーン市トリー地区に3つ目の拠点を開設。今では3カ所で毎週1,800人の子どもたちが通う。07年にはニコラさん1人だったスタッフも、今では演奏指導者を含め70人が働くようになった。

イベントの内容だけでなく、それが地域にとってどんな意味があるか、地域の人々にどのように参画してもらうかを考えること、そしてそれを地域に説明することが重要だ、というのがニコラさんのアドバイスだ。ビッグ・コンサートを企画した際、最初はチームで手分けをして「オリンピックに合わせて開催される芸術祭で、世界的な指揮者とオーケストラがこんな小さなまちにやって来て、地元の子どもたちと一緒に演奏するんです」と、1軒1軒ドアをノックして説明して回ったという。それはコンサートの告知だけではなく、システマ・スコットランドの活動を地域の人々に知ってもらうことにも繋がった。

ビッグ・コンサートは、オリンピックという世界最大のスポーツイベントがあって初めて実現したものだ。ニコラさんは「ロンドン2012大会のフェスティバルに参加したことが、自分たちの活動を発展させ、地域活性化に向けた次のステップに進めることに繋がった」と断言する。

「ビッグ・コンサート」の様子(指揮をするのがグスターヴォ・ドゥダメル)
写真提供:Systema Scotland ©Marc Marnie

同時に進めるのは容易ではなかった。レオニーさんは12年9月にパラリンピックの閉会式が終わった後、休む暇もなく翌日からカルチャー2014の仕事に追われた。

もうひとつの大きな転機はルースさんが芸術監督に就任した時だった、とレオニーさんは振り返る。アーティストたちもそれまではあまり真剣ではなかったが、2012フェスティバルでは質が担保されることになり、ビジョンがクリアになったからだという。ルースさんはロンドンをエネルギー源ととらえた上で、英国の他の場所に目を向け、スコットランドの文脈や独自のアプローチを尊重した。ロンドンではロンドンのリーダーシップでフェスティバルを展開し、スコットランドなど他のエリアでは地域の主導で企画を進められるようになった。

こうして、それまで通常では実現できないような大きなアイディアを、関係者が一致団結して具体化させていった。低所得者層の多い小さな町で世界的な注目を集めた「ビッグ・コンサート」が実現し、「スピード・オブ・ライト」のように国際的に注目される先端的な芸術表現がスコットランドから生まれていったのである。

レオニーさんの考える2012文化プログラムのレガシーは次の3つだ。作品や芸術活動の質的向上が図られたこと、芸術と地域の結びつきが深まり、多くの人々が参加して地域にインパクトを与えたこと、そして多様なパートナーシップを構築できたことである。特に、アーティストの社会におけるポジションが高まったことが大きいという。それはカルチャー2014でさらに進化した(*25)。多くのアーティストたちが14年夏に住民投票の行われたスコットランドの独立をテーマに取り上げたからだ。その結果、アーティストの存在が広く知られ、彼らが市民生活の中で重要な存在だと見なされるようになったのだという。

ロンドン2012大会の文化プログラムから学ぶこと

ここまで、ロンドン2012大会文化プログラムの全体像と、ウェスト・ミッドランズ、スコットランドの2つの地域での取り組みを見てきた。今回の取材や調査で全国展開の様子はかなり明らかになったが、とてもすべてを知り得ることはできない。それほど規模が大きく、複雑な仕組みの上に成り立っていたということだ。最後に東京2020大会の参考となりそうな成功のポイントや留意点を述べておきたい。

◎ひとつのビジョン・ブランドと組織委員会のリーダーシップ

まず、ロンドン2012オリンピック・パラリンピック競技大会というひとつの大きなブランドの下で、共通のビジョンをもって展開したということだ。中には独自のブランドを掲げた地域もあるが、大きな成果は得られなかったという。「とにかく一番パワフルなブランドはロンドン2012。オリンピックのブランドを使うことはさまざまな難しい問題をはらんでいるが、それを乗り越えていく価値は十分にあった」とポールさんは力説する。

そのためには、組織委員会がリーダーシップを発揮することが欠かせない。ロンドン2012大会では10年にカルチュラル・オリンピアード・ボードと芸術監督が設置されて組織委員会のリーダーシップとガバナンスがより明確になった。それを機に、文化プログラムの企画や運営はスムーズになった、というのが複数の関係者の意見だ。

●スコットランドの特徴的な事業

スコットランドの文化プログラムで国際的に話題になったのは、レガシートラストUKが資金提供を行った4つの大型プロジェクトのひとつ「スピード・オブ・ライト」だろう。市民ランナーがLEDの装着されたライト・スーツを着て、日没後、自然や都市空間の中を走り抜け、光のパフォーマンスを演じるものだ。グラスゴーを活動拠点とするアート団体NVAと、照明デザイナーや振付家とのコラボレーションにより実現。2012年8月エジンバラ国際フェスティバルで披露され、合計4,000人以上のランナーが参加した。NVAはレガシートラストUKのほか、クリエイティブ・スコットランド、エジンバラ国際芸術祭などから2.5億円以上の資金を獲得して実現させた。

NVAは、同年11月にブリティッシュ・カウンシルの招聘で横浜のスマートイルミネーションに参加、山下公園などで2日間のパフォーマンスを行った。その後もマンチェスター近郊のサルフォードやドイツ・ルール地方でも実施。ヨークシャーでは、リーズを拠点に活動するフェニックス・ダンス・シアターと共同で、ゴースト・ペロトンという自転車を使った光のパフォーマンスを披露した。それは同地で行われたツール・ド・フランスのオープニングを飾るなど、NVAは最先端の芸術表現を進化させ、国際的なカンパニーとして成長し続けている。

スコットランドの2カ所を含む全英8カ所の海岸に2,000のテントを張って行われた光と音のインスタレーション「ピース・キャンプ」もユニークな事業だった。夕刻になると、内部に仕掛けられたライトでテントが暗闇に浮かび上がり、中からはさざ波や自然の音とともに、愛をテーマにした詩が聞こえてくる。朗読するのは英国を代表する女優フィオナ・ショーや詩人たちである。作品のタイトルが示すとおり、オリンピックの究極の願い“平和”がテーマとなっていた。

エジンバラ国際フェスティバルで披露された「スピード・オブ・ライト」
写真提供：NVA

＊25 グラスゴー2014の文化プログラムは、ロンドン2012大会のそれと似た構造で、カルチャー2014が2013年7月にスタート、その後フェスティバル2014が14年の7月19日から8月3日のコモンウェルス大会終了まで行われた。3,000を超える公演、3,600日を超える展覧会、5,600の教育プログラムが実施され、210万人が参加した(Creative Scotland and Glasgow Life「Glasgow 2014 Cultural Programme Evaluation: Overarching Report」(2015年6月))。

◎多様なパートナーシップ

オリンピック・パラリンピック競技大会には、極めて多くの機関や団体が関係する。文化プログラムも同様だ。組織委員会の下で、アーツカウンシル・イングランド、レガシートラストUK、ロンドン市などの関係者がひとつのチームとなって取り組んだことが、成功の最大要因だった。これはフェスティバル関係者の共通した見解だ。

またレオニーさんによれば、クリエイティブ・プログラマーの仕事で最も大変だったのは、関係先への報告と調整だったという。彼女には組織委員会、アーツカウンシル・イングランド、クリエイティブ・スコットランド、スコットランド政府、グラスゴー市の5カ所に対する報告義務があった。しかもそれぞれに異なる要望や優先事項があったというから、その大変さは容易に想像できる。異なるステークホルダーの要望に応えて、それぞれを意味のあるものにすることが彼女の重要な仕事だった。

個々の事業でも、分野や立場を超えた多様なパートナーシップが形成された。文化プログラムによって3000を超えるビジネスパートナーが誕生したという。重要なレガシーのひとつだろう。

◎全国展開と地域独自のプログラム

クリエイティブ・プログラマーは月に1回程度ロンドンに集まって、関係者とミーティングを行っていた。地域ごとに進捗状況や方針が異なるため、全国展開にはさまざまなハードルがあったという。国全体の考え方を優先するか、地域の事情やニーズを優先するか、難しい判断を迫られた。

そういう状況の中で、クリエイティブ・プログラマーはそれぞれの地域で文化プログラムを企画、推進していった。この仕組みが機能したのは、関係者間の信頼と透明性があったことに加え、文化施設の運営やフェスティバルなど、経験や知識の豊富な人材が責任のある高いポジションで雇われていたからだという。

◎ハイクオリティ＋草の根参加

プログラム面では、草の根の参加型のものと国際的にも通用する芸術性の高いものの両方が必要だ。前者の代表がインスパイア・プログラムや「コミュニティ・ゲームズ」であり、後者の代表がオペラ『光から水曜日』や「スピード・オブ・ライト」である。ロンドン2012大会の文化プログラムの成果として、イベント件数や参加者数などが紹介されることが多い。しかし、それは結果の数字であって、最初から件数や参加者数の多さを目指すのは適切ではない、というのも関係者に共通する意見だ。

「オペラ『光から水曜日』はわずか4回の公演、観客は5000人だったが、ウェスト・ミッドランズの他のすべてのイベント全体と同じぐらい大きなインパクトがあった。イベントや参加者の多さは重要ではない」とポールさんも言う。

◎野心的なプロジェクトへのチャレンジ

最後に付け加えておきたいのが、大きな夢を描くこと、野心的なプロジェクトに取り組む、ということだ。それを実現するにはさまざまなハードルを乗り越えなければならない。しかし、オリンピック・パラリンピックを、まさしく「一生に一度きり」の機会ととらえ、子どもも大人も、生涯の記憶に残る事業とするためにも、全国で行われるシンボリックな文化プログラムの役割は極めて大きい。

「ビッグ・コンサート」を主催したシステマ・スコットランドのニコラさんは当初、〝ロンドン〟という名前のついたオリンピックがそれ以外の地域にどんな意味があるのか疑問に思っていた。でも文化プログラムのことを知り、それがロンドンだけのものではないこと、英国全体の芸術文化にも大きなチャンスがあること、そして自分の地域にも大きなインパクトをもたらすことを確信し、コンサートを実現させた。

「何かアドバイスは」と尋ねたところ、彼女からは「とにかく野心的なアイデアを考えること、小さな出来事の中に大きなチャンスが潜んでいることを忘れないこと」という答えが返ってきた。

●

東京2020大会まで4年余りとなった。組織委員会や文化庁、東京都などでも文化プログラムに向けた準備が進んでいる（資料編参照）。13年9月の招致決定から既に2年半が経過したことを考えると、残された時間は決して長くない。

最近になって、ロンドン2012大会の複数の関係者が語っていた言葉が実感をもって感じられるようになった。「文化プログラムは長い旅のようなものだった」と。どこにたどり着くかわからない誰も経験したことのない旅を、多くの関係者と共に、数々の変化や困難を乗り越えて実現してきたというのだ。「その困難をも楽しんでください」。ロンドン市の文化部長ジャスティーン・サイモンズさんのメッセージだ。

東京2020大会を文化プログラムでも成功させ、成果を残すこと。私たちの力量が問われるのはこれからだ。

◎主要参考資料
Arts Council England and LOCOG, *Reflections of the Cultural Olympiad and London 2012 Festival*, Apr. 2013
Institute of Cultural Capital, *London 2012 Cultural Olympiad Evaluation Final Report*, Apr. 2013
Arts Council England, *The Cultural Olympiad and London 2012 Festival in the West Midlands*
Cultural Research Analyst, West Midlands Cultural Observatory, *Cultural Olympiad in the West Midlands: An evaluation of the impact of the programme (2008-2012)*, Nov. 2012
The Scottish Arts Council, *A Strategic Framework: London 2012 and Glasgow 2014*, Sep. 2009
Creative Scotland, *Learning from Scotland's London 2012 Cultural Programme*
University of the West of Scotland, *Evaluating Scotland's London 2012 Cultural Programme*, Dec. 2013
ロンドン2012大会以前の文化プログラムについては、各大会のオリンピック組織委員会の公式報告書などを参照した。

◎インタビュー・面会（2012.7～2016.1）
・ロンドン（カルチュラル・オリンピアード・ボード、ロンドン2012フェスティバル・チーム等）
Deborah Bull, Nick Dodds, Fran Hegyi, Ulrika Hogberg, Jude Kelly OBE, Ruth Mackenzie OBE, John Mortlock, Justine Simons and Moira Sinclair
・ウエスト・ミッドランズ＆スコットランド（クリエイティブ・プログラマー、事業パートナー等）
Leonie Bell, Svend-Einar Brown, Lorna Duguid, Angus Farquhar, Paul Kaynes, Nicola Killean, Liz Thompson and Jo Walmsley

資料編　東京2020大会に向けた検討・準備状況

東京2020大会の文化プログラムに関する準備状況はどうなっているのだろうか。組織委員会、文化庁、東京都について、概要を整理した。

◎組織委員会

組織委員会は2015年2月に大会開催基本計画を発表。全員が自己ベスト、多様性と調和、未来への継承の3つを基本コンセプトとする大会ビジョンを策定し、「スポーツ・健康」「文化・教育」などの5本柱に基づいて専門委員会を設置、検討を重ねてきた。

今年1月末にその成果を「東京2020アクション＆レガシープラン2016」の中間報告として発表した。アクションは、16年秋から20年にかけて日本全国で行うイベント・取り組みを整理したもの、レガシーは東京2020大会をきっかけにその後の東京・日本そして世界に何を残していくのかをとりまとめたものである。

文化・教育では、より多くの人々を東京2020大会に巻き込み、大会成功の気運を醸成するという基本的な考え方を提示。文化では残すべきレガシーを4つに整理し、文化の祭典としてあらゆる人々が参加する東京2020大会文化プログラム(仮称)を展開するとしている。そして、専門委員会での意見を政府、東京都、組織委員会・その他の別に整理、公表した。

ロンドン2012大会のインスパイア・マークに相当するものとして、オリンピック・パラリンピックブランドの非営利目的の活用を促すマーク(第2エンブレム)を開発するとともに、文化プログラム等で活用可能な仕組みを構築し、分野横断的に展開するとしている。

16年夏のリオ大会前に最終案をまとめ、秋から東京都や政府等とともにアクションを実施する予定だ。

◎文化庁

文化庁は、2015年5月に閣議決定した「文化芸術の振興に関する基本的な方針(第4次基本方針)」の中で、「2020年東京大会を契機とする文化プログラムの全国展開」を明記した。それに先立ち、14年12月には「2020年に向けた文化イベント等の在り方検討会」を設置。15年4月まで4回の会議を開き、若手アーティストらから数々のユニークなアイディアが提案された。

同年7月には「文化プログラムの実施に向けた文化庁の基本構想」を取りまとめ、「文化力プロジェクト(仮称)」を、①我が国のリーディングプロジェクトの推進、②国が地方公共団体、民間とタイアップした取り組みの推進、③民間、地方公共団体主体の取り組みを支援、の3つの枠組みで実施するとしている。

「文化力プロジェクト(仮称)」には、イベント数20万件など、ロンドン2012大会の実績を上回る3つの数値目標が設定されている。ただし、そのすべてが公式文化プログラムとして想定されているわけではない。東京2020大会の機会を活かして“文化芸術立国”を実現するために実施するのが「文化力プロジェクト(仮称)」で、その中に公式文化プログラムが含まれているという関係だ。

残念ながら、来年度はリーディングプロジェクトの予算措置が見送られたが、従来の補助金の枠組みの中で文化プログラムを推進する予定だ。文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業では、2020東京大会の文化プログラムを見据えた事業が補助対象となった。英国のクリエイティブ・プログラマーに相当する役割も期待される文化芸術アソシエイツの起用を念頭に、文化施策推進体制の構築を促進する事業も創設された。これは将来の地域アーツカウンシルへの発展を睨んだものだ。

◎東京都

2005年9月に元・石原知事が2016年大会の招致を表明して以降、東京都は文化政策を強化してきた。翌年12月に東京芸術文化評議会を設置し、08年に「東京文化発信プロジェクト」をスタート、12年11月にはアーツカウンシル東京を設立している。

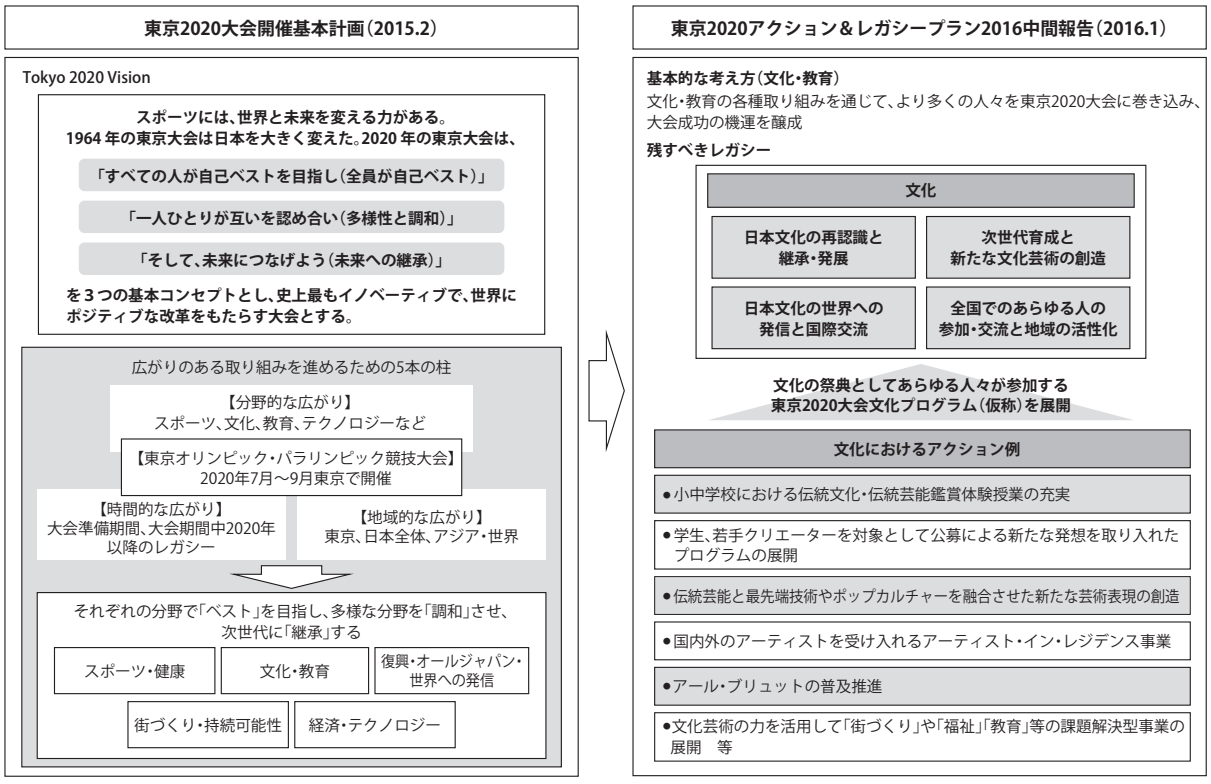
13年9月に東京2020大会の招致が決定し、14年6月には舛添知事の下で第4期評議会が発足、「文化プログラム検討部会」を新設。それと並行して東京文化ビジョンの策定が進められ、15年3月に8つの文化戦略が発表された。これは15～25年度を対象にしたもので、東京2020大会をきっかけに東京を世界のどこにもない文化都市にしようという狙いが込められている。ビジョン発表に合わせ100億円の芸術文化振興基金も設置された。

15年7月～9月にかけては、部会や評議会において、文化プログラムの基本方針等について検討を実施。12月には東京2020大会全体について、大会後のレガシーを見据えた東京都の取り組みを発表した。文化プログラムについては評議会での検討内容を反映し、「大会を文化の祭典としても成功させ、『世界一の文化都市東京』を実現します」として、①これまでにない多彩で魅力的な史上最高の文化プログラムを展開、②あらゆる人が芸術文化を享受できる社会基盤の構築、③東京のもつポテンシャルを活用し、芸術文化の魅力を世界に発信、という取り組みの方向性を定めた。

具体的には、文化プログラムをけん引するシンボリックな事業、公募等による新たな発想を取り入れた事業などが計画されている。

このほかにも、内閣府は、文化を通じた機運醸成策に関する情報共有および連携等を目的として、「2020東京大会に向けた文化を通じた機運醸成策に関する関係府省庁等連絡・連携会議」を開催。(公社)企業メセナ協議会も、Creative Archipelago(創造列島)というスローガンを掲げ、東京2020大会を見据えた民間企業の取り組みを推進しようとしている。

◎公益財団法人 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会



◎文化庁

文化プログラムの実現に向けた文化庁の基本構想（2015.7）

趣旨

「文化芸術立国」の実現のために、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会およびラグビーワールドカップ2019の機会を活かすとともに、それ以降も多様な文化芸術活動の発展や、文化財の着実な保存・活用を目指し、組織委員会、関係省庁等と連携して、2016年秋から全国津々浦々で**文化プログラムを推進**。

【文化庁の取り組む文化プログラム「文化力プロジェクト（仮称）」の数値目標】
・20万件のイベント・5万人のアーティスト・5000万人の参加・訪日外国人旅行者数2000万人に貢献

文化庁が進める取り組みの3つの枠組み

1．我が国のリーディングプロジェクトの推進（国が主導するプロジェクト）	日本各地での文化芸術によるレガシー創出に向けた基盤的な取り組みを推進（文化芸術プロデューサー人材等の育成、新たな文化×産業の拠点の形成、日本文化の再発見とその魅力の発信）
2．国が地方公共団体、民間とタイアップした取り組みの推進	日本遺産、文化芸術による地域活性化・国際発信事業、劇場音楽堂等活性化事業等を支援
3．民間、地方公共団体主体の取り組みを支援	地域の祭りをはじめ、我が国の多様な文化芸術を継承、発展させる全国津々浦々の文化芸術に関する取り組みを支援

平成28年度の施策

文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業

◎事業の目的

地方公共団体が実施する、地域の文化資源等を活用した計画的な文化芸術活動や、2020東京大会の文化プログラムを見据えた文化事業、訪日外国人が鑑賞・体験できる事業を支援し、文化芸術による地域活性化、地域文化の国際発信、文化芸術によるインバウンドの増加を推進

◎補助対象事業

・音楽、演劇、舞踊、美術、メディア芸術等を中心とした地域振興のための文化事業
・2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の文化プログラムを見据えた文化事業
・多言語対応等により、日本人に限らず訪日外国人も鑑賞・体験できる文化事業

◎事業の区分

（1）文化芸術地域活性化事業
（2）創造都市事業
（3）訪日外国人対応事業
（4）新国立劇場との連携公演事業
（5）文化の力による心の復興事業
（6）地域における文化施策推進体制の構築促進事業（新設）
・2020東京大会を、スポーツのみならず文化の祭典として、日本全国で特色ある文化活動が行われる大会にするとともに、同大会終了後も文化芸術による地域の活性化など、その成果が継承されるよう，全国の地方公共団体が文化事業を実施するための文化施策推進体制の構築を促進

◎東京都

2020年に向けた東京都の取り組み ―大会後のレガシーを見据えて―（2015.12）

大会を文化の祭典としても成功させ、「世界一の文化都市東京」を実現します

2020年に向けた取り組みの方向性

1 これまでにない多彩で魅力的な史上最高の文化プログラムを展開します

文化プログラムを先導するリーディングプロジェクトを推進するとともに、さまざまな主体が連携・参加し、これまでにない先進的な文化プログラムを展開します

主な取り組み
・文化プログラムをけん引するシンボリックな事業を展開
・公募等に基づきさまざまな主体の新たな発想を取り入れた事業展開を促進
・海外との交流を推進し、国際的な発信力を強化
・東京と全国各地が連携し、オールジャパンとしての魅力を向上

2 あらゆる人が芸術文化を享受できる社会基盤の構築を進めます

アール・ブリュットの普及推進など、パラリンピック開催を通じた共生社会づくりと連動し、文化の面でも世界で最もバリアフリーな都市として認められるよう取り組みを推進します

主な取り組み
・自治体、大学、福祉施設、NPO等との連携によるアール・ブリュットの普及推進や制作・交流・展示のための拠点の形成
・学校、児童館、公民館等、地域の様々な場所において芸術文化を体験できる機会を創出
・アーツカウンシル東京によるアートNPO等への活動支援
・文化施設におけるバリアフリー化、開館時間の延長、多言語対応、無料Wi-Fi環境整備など時代のニーズに即した来館者サービスの向上

3 東京の持つポテンシャルを活用し、芸術文化の魅力を世界に発信します

多彩な文化拠点や最先端技術と芸術文化の融合など、東京のポテンシャルを最大限に活用するとともに、国際的な発信・交流を強化します

主な取り組み
・芸術文化資源の集積を一層推進して、地域の個性を生かした文化拠点を形成し、地域活性化策や観光施策と連携した取り組みを推進
・海外の芸術文化団体や文化施設との連携による、国際的な発信・交流を強化
・テクノロジーとアートを融合させたコンペティションを実施
・キュレーターやアートディレクターなどの芸術文化を支える人材を育成

◎スケジュール